

吃音児の 自己肯定感の 低下を防ぐ

吃音に関する研究報告書

アンケート調査期間
2022年10月29日～12月31日

吃音があると
どうなるの？

吃音について
ちゃんと
理解しよう

聖隷クリストファー大学
リハビリテーション学部
言語聴覚学科

谷 哲夫



研究に対する思い

吃音は、学齢期以降で 人口の約1%を占める 出現頻度の高い 言語障害です。



吃音は言語面の問題(どもってうまく話せない)にとどまらず、心理的・精神的な問題(話すことやコミュニケーションに対する不安など)、社会生活面の問題(対人関係の構築、進学、就職時の面接の困難など)、人生に様々な形で困難をもたらします。吃音児の自己肯定感の喪失は思春期以降と考えられています。そのため社会不安障害の発症などの社会的不適応を起こす場合が少なくないのです。本研究は、思春期吃音児の自己肯定感促進要因を明らかにし、研究結果を教育現場などに周知する啓発活動を行うことで、吃音児の将来的な社会不安障害の発症を予防することを目的として実施しました。このパンフレットでは、研究の結果を重要な部分に絞ってわかりやすく説明します。



聖隷クリストファー大学

リハビリテーション学部
言語聴覚学科

谷 哲夫

研究方法

吃音児の自己肯定感の喪失は思春期以降と考えられていますが、思春期の吃音児を調査対象とした場合、調査自体が吃音をさらに強く意識してしまう危険があるため、本研究では吃音を克服したと自覚している成人吃音者を対象として、思春期の過去にさかのぼって聞き取り調査、および質問紙によるアンケート調査に回答いただき、思春期の吃音児の自己肯定感促進要因を明らかにしました。

- ◆アンケート調査協力者02
- ◆吃音を自覚する年齢03
- ◆学校・園生活03
- ◆吃音児の自己肯定感 04
- ◆吃音を治したいと思う要因とは05
- ◆吃音を負の要素として意識した影響...05
- ◆吃音者が今の生活を
送ることができる要因05
- ◆まとめ 06

アンケート調査協力者

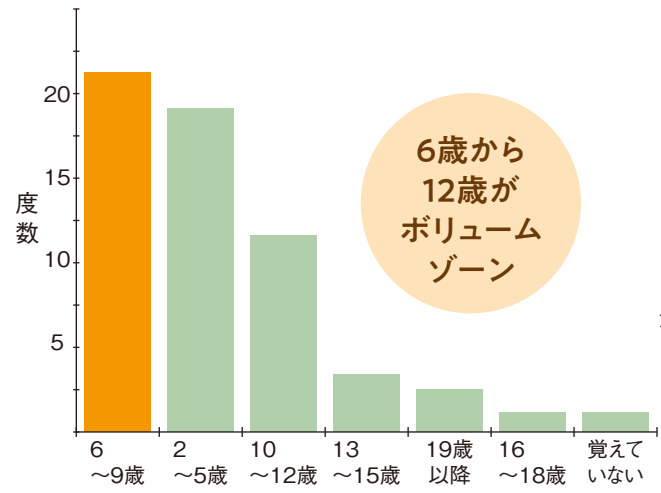
- 全国言友会連絡協議会の許可を得て、加盟団体にアンケート調査の協力を依頼
- 言友会地域メーリングリストを利用し、アンケート調査協力を依頼
- Google Formでの回答提出をもって研究協力に同意したとみなした
- 最終的に59名の会員から回答を得た

年齢 性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
女	0	4	1	1	3	0	0	9
男	2	4	6	11	9	7	11	50
合計	2	8	7	12	12	7	11	59

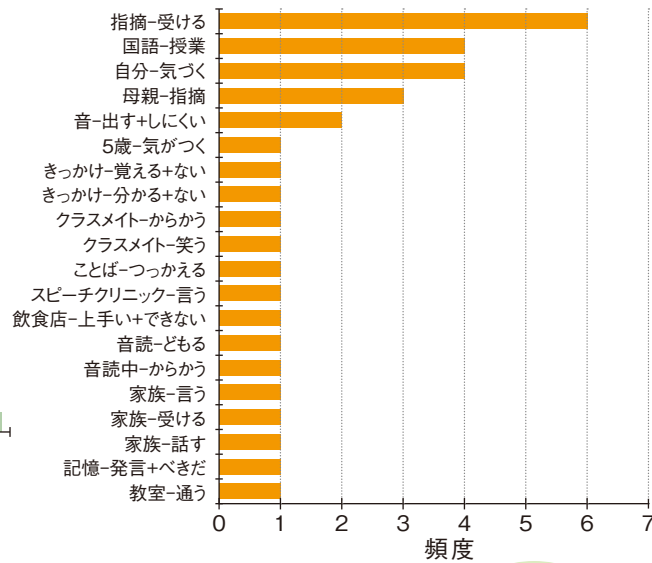


吃音を自覚する年齢

Q 自分の吃音に気づいたのは何歳くらいですか？



Q 気づいたきっかけは何ですか？



Comment

国語の授業での配慮から音読のつかえや、発話の指摘を受け吃音を自覚

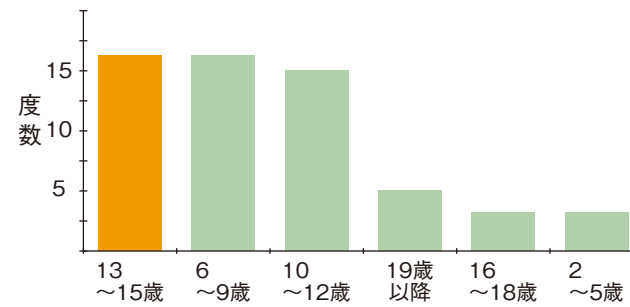
一般的に吃音の発症年齢は2歳から4、5歳がボリュームゾーンと言われていて、吃音を自覚する年齢として同年齢も多いといえますが、10~12歳も少なくありません。これらの結果は、吃音の自覚に至るまでには発症から数年以上経過する場合が多いことが示されています。

6~9歳が最も多いことは、国語の授業が小学校から行われることと対応するようです。実際、原文では「国語-授業」「音読中-からかう」「音読-どもる」という係り受け関係がみられ、国語の授業において自身の吃音に気づくことが示されています。さらに、「母親-指摘」「家族-言う」「家族-受ける」などの家族からの指摘や、「クラスメイト-からかう」「クラスメイト-笑う」のような係り受け関係にみられるようにクラスメイトから笑われたりからかわれたりすることが自覚するきっかけになっています。

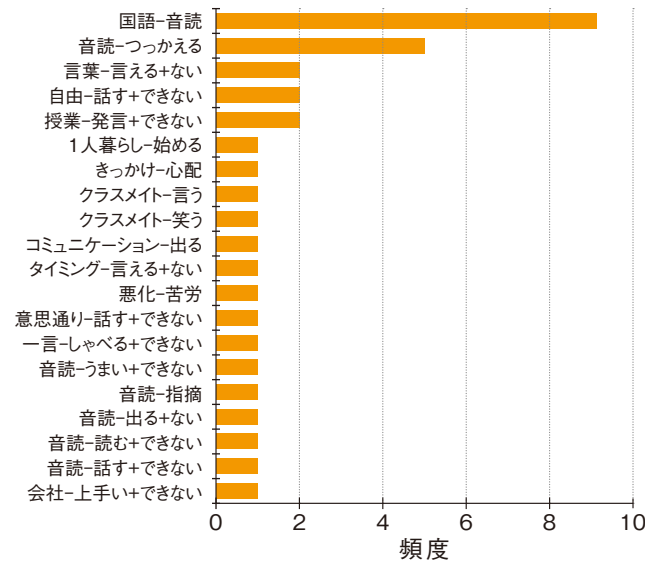


吃音児の自己肯定感

Q 吃音を負の要素として意識しはじめたのは何歳くらいですか？



Q 吃音を負の要素として意識したきっかけは何ですか？



Comment

吃音を負の要素として意識し始めるのは6歳からが多い



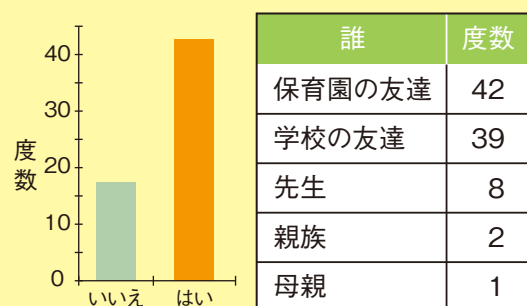
自己肯定感の低下は学童期ではみられず、中学生から思春期にかけて観察されるという報告があります。話す領域は自己肯定感の尺度の一つですが、吃音児にとっては特に重視する傾向があります。本研究では、吃音を負の要素として意識し始める年齢が10~15歳で多い点は、思春期における自己肯定感の低下と一致しています。本研究では、6~9歳、すなわち学童期ですでに吃音を負の要素として意識していることが示されました。この結果は、学童期で自己肯定感が低下している吃音児が一定の割合で存在する可能性を示唆しています。

吃音を負の要素として意識した最初のきっかけに、国語の授業での音読が最も多く挙げられていることが特徴です。原文の「音読-つかえる」という係り受け関係も国語の授業における出来事と考えられます。重要なことは、国語の授業で発話困難になってしまった経験が吃音を負の要素として意識し始めるきっかけになっているという点です。「クラスメイト-笑う」「クラスメイト-言う」などの係り受け関係がみられており、授業という公の場で自分の吃音が周知されてしまったことで、その後のからかいやいじめに繋がることが示唆されます。この点については、後の「吃音を治したいと思う要因」や「吃音を自分の負の要素として意識する要因」の解析結果に示されています。このように概観すると、「吃音を自覚するきっかけ」と「吃音を負の要素として意識し始める要因」は重なることが多いことが分かります。

吃音を負の要素として意識し始めるのは国語の授業だけではなく、「コミュニケーション-出る」や「会社-上手い+できない(会社で上手くできない)」のような係り受け関係が原文でみられるように、コミュニケーションが必要なあらゆる環境がきっかけになり得ます。吃音を自分の負の要素として意識し始めた年齢に19歳以降と回答した方が少なくないことも、それを裏付けているといえるでしょう。

学校・園生活

Q 吃音が原因でいじめやからかいを受けた経験はありますか？



誰	度数
保育園の友達	42
学校の友達	39
先生	8
親族	2
母親	1

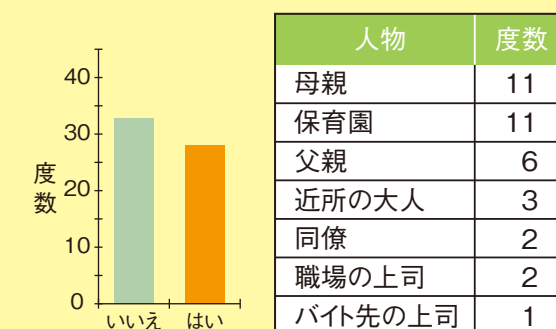
Comment

「からかい・いじめ」は大人からも

どういった行為がいじめやからかいと感じるかは人によって様々です。主観的な要素が強くなります。しかし、いじめやからかいを受けた経験のある回答者は経験のない回答者の倍以上となりました。保育園や学校の友達から受けることが多いのですが、この時期の子どもには吃音の知識が乏しいため、吃音児の特異な話し方に対して素直に疑問を発信したり、面白くて真似をしたりすることがあるのでしょう。吃音児にとっては、それが辛いこともあります。一方、先生や親族からいじめやからかいを受けたという回答があったことには注意が必要です。吃音の正しい理解の普及が必要です。



Q 誰かから吃音を治すように言われた経験はありますか？



人物	度数
母親	11
保育園	11
父親	6
近所の大人	3
同僚	2
職場の上司	2
バイト先の上司	1

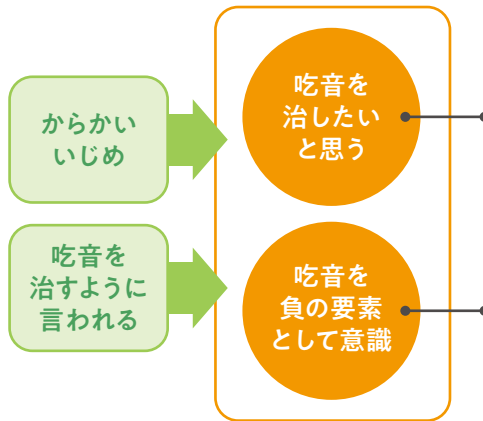
Comment

様々な立場の人から吃音を治すように言われるが、言われなかった回答者の方が多い



家族や保育園の先生など、日常的に身近にいる人から吃音を治すように言われることが多いようです。他には、職場関係の人から吃音を治すように言われています。コミュニケーションが重要な場面で適切に対応できるスキルが求められているのでしょう。一方で、治すように言われたことがない回答者の方が多かったことは、吃音があっても社会では十分にコミュニケーションができる現状を示しているともいえます。

吃音を治したいと思う要因とは



■ 吃音を治したいと思った要因

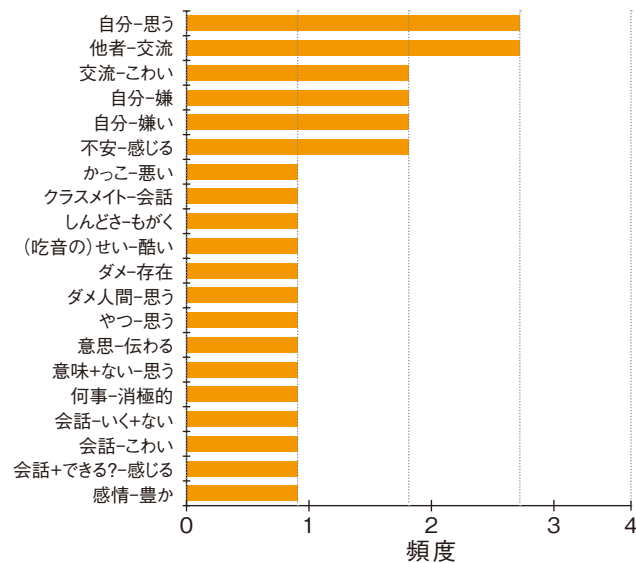
本研究で実施した解析結果を簡単な図に示します。吃音を治したいと思う最も強い要因は「からかいやいじめを受ける」ことです。からかいやいじめを受けるようになるきっかけは、国語の授業のように吃音が否応なく周囲に知られることと考えられます。次に強い要因は「吃音を治すように言われる」ことです。すなわち、吃音は悪いもので、存在してはいけないもの、と捉えてしまい、治したいと思うようになると考えられます。

■ 吃音を負の要素として意識する要因

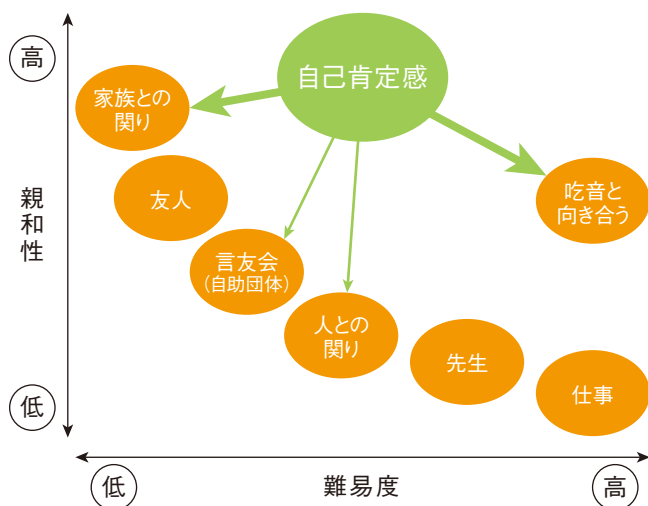
吃音を負の要素として意識する最も強い要因は「からかいやいじめを受ける」ことで、次に強い要因は「吃音を治すように言われる」ことです。「吃音を治したいと思う要因」と「吃音を負の要素として意識する要因」は同じであることが示されました。

吃音を負の要素として意識した影響

係り受け解析に現れることばには「怖い」「嫌い」「ダメ」という否定的な表現に「会話」「自分」などの単語が係わっています。吃音を負の要素として意識すると、他者との交流を怖く感じてしまうことや、自分のことを嫌いになる、自分がカッコ悪い、ダメ人間だという感情が生じることが分かります。このような感情は自己肯定感の低下に結びつくと考えられます。



吃音者が今の生活を送ることができている要因



Comment

自己肯定感は「家族との関係」と「吃音と向き合う」こと



アンケートでは、吃音のない人たちと同様に生活を送ることができている要因を思春期にさかのぼって自由に記載していただきました。その記載内容を解析したところ、「自己肯定感」を含む8つのカテゴリーに分類できました。さらに、これらのカテゴリーを対象に共起関係によることばネットワーク図を作成したところ、「自己肯定感」と関係のあるカテゴリーとして「家族との関り」「言友会(自助団体)」といった身近な(親和性が高い)と考えられるカテゴリーのほか、「人との関り」「吃音と向き合う」といった難易度が高いと考えられるカテゴリーが示されました。特に「家族との関り」と「吃音と向き合う」は「自己肯定感」との強い関係が示されました(太い矢印)。

まとめ

身近な人たちと共に吃音に向き合うことが大切

吃音は、学齢期以降で人口の約1%を占める、出現頻度の高い言語障害です。吃音の問題は発話の問題にとどまらず、心理的・精神的な問題や社会生活面の問題など、吃音がある人の生活に様々な形で困難をもたらすことが指摘されています。

吃音を発症すると、周囲の園児や生徒から吃音に対するからかいやいじめを受け、両親や先生からはきちんと話すよう指摘されることにより、吃音を嫌い、恥ずかしく思うようになります。さらに、吃音を持っている自分への自尊感情が乏しくなり、自己肯定感の喪失に繋がることが本研究で明らかになりました。

自己肯定感の喪失は、人との対話や人前での発表などが困難になるだけでなく、生活に支障がでるほどの強い不安や緊張を覚える対人恐怖症(社交不安障害)を併発し(吃音者の40%)、進路選択や就職に大きな問題を抱える場合があります。

本研究では、全国の言友会という吃音者自助団体の会員の方々にアンケートを実施し、思春期にさかのぼっていただき、現在の生活を送ることができている要因と思われることを自由に記載していただきました。解析の結果はこれまでに説明した通りで、「家族との関り」「言友会(自助団体)」といった比較的身近な人との関係が重要であることが示されました。特に強い関係を示した「家族との関り」の原文には「母」「父」などが含まれます。さらに、「人との関り」「吃音と向き合う」といった難易度が比較的高いカテゴリーが含まれました。特に強い関係を示した「吃音と向き合う」の原文には「吃音->受け入れる(吃音を受け入れる)」「治る+ない->自覚(治らないことを自覚する)」などの係り受け関係が含まれました。まとめると、家族などの身近な人たちと共に自身の吃音と向き合う姿勢が大切であることが示されたのです。

吃音児にとって、吃音に関する正確な知識を得ながら自身の吃音を知る必要があります。そして、家族などの身近な人と共に吃音に向き合うことを基軸としながら、徐々に人間関係を広げる(自助団体、人との関り、先生、仕事など)機会を得られるよう周りの人たちが支援する必要があります。他方で周りの人(子どもを含む)たちは、吃音の正しい理解に努め、吃音は決して珍しい症状ではなく、多様な特性の一つであるという理解をすることが重要です。これらの理解が、話し方にとられない寛容な人間関係を築く土台となるでしょう。



聖隷クリストファー大学

SEIREI CHRISTOPHER UNIVERSITY

- | 看護学部 看護学科 | 助産学専攻科 | リハビリテーション学部 理学療法学科/作業療法学科/言語聴覚学科
- | 社会福祉学部 社会福祉学科(ソーシャルワークコース・介護福祉コース・福祉心理コース)
- | 国際教育学部 こども教育学科
- | 大学院[博士前期課程][博士後期課程] 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会福祉学研究科

お問い合わせ先

リハビリテーション学部
言語聴覚学科 谷 哲夫

053-439-1400

<https://www.seirei.ac.jp>

〒433-8558 静岡県浜松市中央区三方原町3453